

## 修了生の「今」から教職大学院の可能性を探る！

教職大学院生の企画・運営で第2回ホームカミングデーが、8月26日(土)に開催されました。5月に行われた第1回は、参加できる修了生と院生及び教員が参加するといったスタンスでしたが、その内容の充実ぶりに触発された第1回参加の院生が、もっと多くの参加者で情報を共有したいとの思いを抱き、第2回が実現しました。今回は4会場に分かれ、時間を区切ってメンバーを入れ替えるラウンドテーブル形式で、修了生の言葉に耳を傾けました。教職大学院での学びが、今の仕事に「どのように活かしているのか」あるいは「どのように活かそうとしているのか」等々が、それぞれの会場で静かに語られました。

今回は、「今」を語る修了生の言葉から見てきた教職大学院の可能性について、紹介することにします。

### ◆修了生の「今」について

宇都宮大学教職大学院は、今年の3月に初めての修了生14名(現職院生10名、学卒院生4名)を送り出しました。修了生の勤務先内訳は、小学校8名(内2名は、学力向上推進リーダー)、中学校2名、県立特別支援学校1名、市町教育委員会事務局3名(3名とも指導主事)です。勤務環境や職務内容はそれぞれですが、教職大学院での学びを学校現場等で活かすことのできる立場にいる者ばかりです。



26日当日は、峰キャンパス7号館ティーチング・コモンズに集合し、最初にオープニングセレモニーを行いました。松本敏専攻長から、修了生には「“今”を自由に語って欲しい」ということ、そして院生には「修了生の言葉に耳を傾け、教職大学院で学んだことがその後どう繋がっていくのかを感じ取って欲しい」とのメッセージがありました。

### ◆修了生から語られたこと

ここで、4会場7グループ全てをまわりながら、その場で耳にした修了生の言葉を列挙してみることにします。

- \* 内省的な姿勢をもつようになった自分がいる。これは教職大学院でリフレクションを繰り返してきた成果の一つだと感じている。
- \* 授業において子どもの姿を徹底的に見るようになった。効果的な指導法や効率のみを追い求めることをせずに、子どもの姿から授業改善を図っていくことを大事にしている。
- \* 通常学級でも常に特別支援教育を意識し、個に

応じた指導をより一層心がけるようになった。

- \* 同僚の先生方にどのようなアドバイスや働きかけをすればいいのか熟考するようになった。先生方の求めに応じて、または先生方のタイプに応じて一人一人違った働きかけをしている。
- \* 組織においてあることを実現させたいときに、何から着手すればいいのかを戦略的に考えるようになった。
- \* できるだけ、根拠や理由を明確にして(事実をもとにして)話をしようと心がけるようになった。
- \* 大学の先生方や教職大学院の仲間の姿が常に頭にあり、そのネットワークを最大限に活かしたいと感じている。

教職大学院でどんな力を手に入れたのかを、それぞれの実践をもとに率直に語る修了生と、それを真正面から受け止めようとする院生の姿が実に印象的でした。



### ◆教師として学び続けるということ

教職大学院での学びは即効性のあるものばかりでなく、将来的に活かせること、あるいは後に気づくことも数多くあります。また、修了生によっては、自分の中に問いを組織ただけで、まだまだ答えが出ていないといった様子も見られます。ただ、学び続けようとする頑強な意志を修了生からは、確かに感じる事ができました。学び続ける構えを手に入れた修了生は、今後もそれぞれの場所で質の高い実践を追い求めるに違いありません。5月に引き続き、修了生の頼もしさと教職大学院の可能性とを感じた1日でした。  
(文責: 近藤秀人)

数年前、複数の不登校生徒の対応に悩んでいた若い女性の先生から聞いた話です。

生徒指導主事を中心に学年の先生方や部活動顧問とも連携・協力して、いろいろと手を尽くしてもなかなか効果が現れず、学級担任として責任を痛感し、どうしたらいいか困っていたときに、生徒指導主事が、「俺たちは、チームだ。担任だからといって一人で責任を感じたり、気を遣ったりしないで、みんなで力を合わせて、粘り強くできることをやってみよう。」と声をかけてくれたので、心から救われた思いがしたとのことでした。

平成27年12月に中央教育審議会答申「チームとしての学校の在り方と今後の改善方策について」が示されました。それによると、「チームとしての学校」を実現するために、以下のような三つの具体的な改善方策及び施策を挙げられています。

- 1 専門性に基づくチーム体制の構築(教員が、学校や子供たちの実態を踏まえ、学習指導や生徒指導等に取り組むことができるように)
  - (1)教職員の指導体制の充実 (2)教員以外の専門スタッフの参画 (3)地域との連携体制の整備
- 2 学校のマネジメント機能の強化(専門性に基づく「チームとしての学校」を機能させるために)
  - (1)管理職の適材確保 (2)主幹教諭制度の充実 (3)事務体制の強化
- 3 教職員一人一人が力を発揮できる環境の整備(教職員がそれぞれの力を発揮し、伸ばしていくことができるようにするため)
  - (1)人材育成の推進 (2)業務環境の改善 (3)教育委員会等による学校への支援の充実

教職員の増員は、学校現場が長年にわたって待ち望んでいることですので、予算面では財務省に、地方交付税交付金等と職員定数管理では総務省に、決定権限の手綱を握られている文部科学省の頑張りを心から期待しています。

## 《シリーズ:教職大学院授業紹介②「社会科授業デザイン論」(選択科目[前期])》

本講義は、思考力・判断力・表現力を育成する社会科の授業をいかに組み立てればよいかについて学びます。初めに総論的な講義と社会科実践史における典型的な実践例を検討します。その後、現職院生が自分の社会科授業実践を振り返り、思考力・判断力・表現力を育成する授業のポイントについて提案します。最後に学卒院生も含めて全員が一人一人実際に授業デザインを作成して模擬授業などの形式でプレゼンを行い、全員で検討するものです。

現職院生は授業を数多く経験しているのに対し、学卒院生は教育実習など限定的なものしか経験していません。このような差のある集団で、社会科の実際の授業を取り上げ、それに基づいて議論を行うには、それぞれの到達目標を明確にすることが大切です。

学卒院生は学段階で受けた社会科教育法の授業を振り返り、現職院生が経験に基づいて自らの授業を説明



するのを聞いて、自分の知識と経験が当てはまることを確認します。その上で、現実の授業の多様性に気づき、言語化できるようになることを期待しています。

一方、現職院生は学卒院生に当初範を示すだけに見えるかもしれませんが、自らの実践を学卒院生にも分かるように説明できなければならないので、自らの授業をより深く考察することになります。多くの実践が出されることにより、異なる視点や考え方から自らの実践について省察的に学び直すことができます。そうして現場に戻ったときに、他の教科等の授業をデザインするときや若手を指導するときに役立つような力を獲得するでしょう。

今年度は、現職3名(中学校社会1, 小学校2)と学卒4名(1年生2, 2年生2)が受講し、ゴミ処理、米作り、鎌倉幕府、平和主義、基本的人権などをテーマにした授業デザインができました。最後に、検討の結果をふまえて、指導案やワークシートの修正を行い、最終レポートとしました。

(担当:松本 敏)



《編集・発行》宇都宮大学大学院 教育学研究科 教育実践高度化専攻(教職大学院)

〒321-8505 栃木県宇都宮市峰町350番地 Tel: 028-649-5242 <http://www.edu.utsunomiya-u.ac.jp/koudoka/index.html>

◇教職大学院Facebook: <https://www.facebook.com/uuptnet> ※院生が編集し、教員が管理しているFacebookです。